

論文の内容の要旨

論文題目 1920年代アメリカにおける女性の喫煙と反紙巻タバコ運動

——地域共同体の秩序をめぐる——

氏 名 安田こずえ

アメリカにおいて 1920 年代に普及したとされる女性の紙巻タバコの喫煙は、現実の地域共同体でどのような議論を巻き起こし、どのように受け入れられていったのか。先行研究の多くは近代化に伴う紙巻タバコ市場の拡大という観点から、19 世紀末に機械による紙巻タバコの大量生産が始まり、まず成人男性や少年の間で普及し、第一次世界大戦を経て 1920 年代に女性に市場が拡大し、全国規模の広告が女性の喫煙行動を牽引したとしている。

しかし、実際には上の見解と齟齬をきたすいくつかの事実が存在している。第一に、新聞や雑誌には 1920 年代以前の 20 世紀転換期から「女性の喫煙普及」に関する記事が見られた。しかし、そこには客観的データや実態がほとんど示されておらず、焦点は女性の喫煙の是非よりはむしろ、反紙巻タバコ運動家とタバコ製造会社の対立関係に置かれていた。第二に、女性の喫煙が普及したとされる 1920 年代初めから、女性の喫煙広告が開始される 20 年代後半までに数年を要しているが、それはタバコ会社が反紙巻タバコ法の完全撤廃を待つ必要があったからである。反紙巻タバコ運動は 19 世紀末に勢力を拡大しながら各州で反紙巻タバコ法を成立に導き、1911 年には連邦最高裁判所でアメリカン・タバコ・トラストを敗訴させ、1920 年代を通して女性の喫煙に反対していた。第三に、自立心と高学歴を有する「新しい女性」の間に喫煙が定着したと言われる中で、若い女性教師や学生

がその喫煙をめぐる裁判で敗訴したケースが見られたことも注目に値する。

このような事実を踏まえれば、女性の喫煙がこの時代のアメリカ社会で均質的に容認されたのか、あるいは誰によって、どのような理由で反対されたのかを改めて問い直す必要があると思われる。本論文では、女性の喫煙が可視化されはじめた 19 世紀半ばに遡って喫煙女性が意味したものを考察し、都市部から小さな農村の共同体が女性の喫煙問題に対処していく過程を詳細に議論することで、1920 年代アメリカにおける社会変化に関して新たな光を投じることを目的としている。

元来タバコは、商品の形態によって喫煙者の社会的地位を表す嗜好品であった。1880 年代に紙巻タバコといえば、高級な手巻き紙巻タバコを指し、その喫煙者はヨーロッパ上流階級の影響を受けたニューヨークの社交界に出入りする「ダンディ」や富裕層の女性であった。肉体労働や儉約を尊ぶ中西部や南部の伝統的中産階級にとって、紙巻タバコ喫煙は男女の境界を崩壊させる放埒の象徴と受け止められた。

しかし一方で、都市富裕層の紙巻タバコの喫煙は、パイプタバコや嚙みタバコしか知らなかった労働者や農村の男性にとっての憧れでもあった。そのような状況の中で、19 世紀末に開始された機械生産で低価格となった紙巻タバコを消費する女性層が出現した。彼女たちは伝統的中産階級の家庭に育ち、高等教育を受けて専門職に従事する女性、或いは、工場で働きながら余暇を楽しむ労働者階級や新移民の家庭の娘であった。

紙巻タバコの喫煙者増加を背景に、1899 年、シカゴで反紙巻タバコ連盟が組織され、それは当初は主として男性の喫煙に反対し、紙巻タバコの喫煙が男性の自律を妨げると警告した。さらには、1902 年にイギリスに拠点を移しブリティッシュ・アメリカン・タバコ・トラストを築いたアメリカン・タバコ・トラストの紙巻タバコ販売を禁じる運動を展開し、その成果として、1911 年に連邦最高裁判所は、国境を越えて巨大化するトラストを解体させ、分割されたタバコ会社を米英に振り分けて帰属させた。一方で反紙巻タバコ運動は、女性の喫煙に関しては家庭内など私的な場で行なわれる限り、表立って非難することはなかったが、公的空間での喫煙は女性の公的領域への侵害とみなし、伝統的慣習に反する行為として容認しなかった。

紙巻タバコをめぐる世論は、第一次大戦で一変し、戦場で広く配給された紙巻タバコは「愛国心」や「男らしさ」という新たな表象を与えられた。多数のアメリカ兵士を紙巻タバコの常習的喫煙者にした第一次大戦は、銃後の女性たちの立場も強化した。産業技術の進歩が著しく、経済の浮沈が激しかった 1920 年代にあって、喪失感に見舞われた帰還兵

や急速な社会変化に対応できない男性が出現する中で、戦時中に軍需工場に動員された女性労働者や、男性に代わって専門職に従事した女性が活躍した。その中には、紙巻タバコを喫煙し、短髪でスカート丈の短い細身の服を着た女性も含まれていた。1920年代の女性喫煙者が戦前の女性喫煙者以上に目立ったのは、彼女たちの多くが大学教育を受け、専門職に従事した中産階級の出身であったからである。

このように喫煙は、戦争を機に男性の職域に進出し、参政権によって政治的権利を拡大していく女性たちの新しい自由の象徴として見られた一方、東部の名門女子大学では、喫煙学生の退学事件が相次いだ。実際、1926年にニューヨーク市では、路上で喫煙した21歳の女性教師が軽罪で逮捕されたことが新聞で報道されている。特に、都市部から離れた地域共同体においては、子供たちを教育する女性教師や師範学校の女子学生の喫煙は住民から非難を受けた。1924年、公衆の面前で喫煙したことによりミシガン州立師範学校の女子学生アリス・タントンも校則違反で退学処分を受け、裁判に訴えたが復学できなかった。ミシガン州最高裁判所の判決は師範学校の校則を支持し、喫煙の是非を地域の慣習による判断に託した。しかし、この裁判が同時に女性の喫煙そのものは違法ではないとしたことも、喫煙をめぐる法のジェンダー差別を否定した点で重要である。

ニュージャージー州の小さな町セコーカスの公立小学校では、1923年に赴任した喫煙習慣のある女性補助教師ヘレン・クラークが教職を追われ、終身教師資格の認定を拒否された。1923年11月から約4年半の間、新聞紙上で「スモーキング・ティーチャー」事件として注目されたこの事件で、クラークは喫煙のために下宿を追われ、勤務校では保護観察処分を受け、教職を失ったが、行政裁判では敗訴したものの民事裁判で勝利を収め、最終的には当初の契約に基づいて、終身教師資格を勝ち取った。1928年に決着を見たこの事件は、地域共同体には女性喫煙の是非を決定する自由とともに、女性喫煙者個人の公的権利を守る義務が課せられていることを明らかにした。この裁判はこれまで研究者の注目を集めることがなかったが、地域の対立感情が次第に法の支配の中に収束されていくプロセスを実証的に解明する有力な資料であるという点で、示唆に富むものである。

1920年代の女性の喫煙をめぐる論争は、地域共同体に通底する伝統的なジェンダー秩序の根強さを露呈していた。上述の二つの裁判は当該の女性喫煙者が地域の慣習に従順であるかどうかを問うたが、前者は女子学生に学校権威者に従順であることを求め、後者では校長や教育委員長を務める男性指導者に女性教師が従順に振舞うことを求めた。そのために、「スモーキング・ティーチャー」事件の女性補助教師は裁判期間中、すべての公的発言

を男性弁護士に委ね、裁判では彼女が大人しい親孝行娘であることを陪審員に印象づけたのである。

この時期、タバコ産業においても大きな動きがあった。1927年1月、アメリカン・タバコ社は国内で唯一残っていたカンザス州での反紙巻タバコ法の撤廃を受けて、ラッキー・ストライクの女性向け喫煙広告を『ニューヨーク・タイムズ』に掲載したが、その広告が「フラッパー」な女性ではなく、社会的な信用と名声の高い中年オペラ歌手を起用したことも、女性の喫煙につきまとう秩序破壊のイメージがいかに当時のアメリカ人に警戒心をもたらしていたかを物語る。

こうして、アメリカン・タバコ社が女性の喫煙広告を満を持して、しかもきわめて慎重に開始した背景には、世論の倫理観とともに、経済的な必要性が大きく影響していた。アメリカのタバコ会社は国内における同業者間の競争のみならず、タバコ・トラスト解体以後、勢力を盛り返してアメリカ国内に市場を拡大していたイギリスのタバコ会社との価格競争にさらされ、翌1928年には商品価格の値下げを余儀なくされていた。それゆえに、大々的な広告によってアメリカの女性の喫煙市場拡大を喫緊の課題とするタバコ会社は、反紙巻タバコ法という法的拘束からの解放を渴望していたのであった。

以上に述べたように、新聞などメディアの報道で国民の注目を集めた「女性の喫煙」や「女性の喫煙普及」という現象には、道德観をめぐる世論の対立のみならず、地域共同体のジェンダー秩序の問題やアメリカの基幹産業に成長を遂げた紙巻タバコ産業における対英競争など、多くの政治・社会的構造が複雑に関係していた。本論文が目指したのは、まさに女性の喫煙論争に関わる多様なアクターや要因の間の関係性を現実社会に即して見ることであった。

1920年代の女性喫煙の歴史的な意味は、その普及や広告開始との因果関係以上に、それがこの時代の変化に地域共同体がどう対応したかを示す試金石のような役割を果たしていたことにある。経済活動の中心が生産から消費へと移行し、都市化が急速に進み、女性の政治的権利が大きく拡大したアメリカの1920年代の社会変化の中で、女性の喫煙問題もまた、伝統的価値観をめぐる地域やジェンダーの対立を調整しつつ、ミシガンやニュージャージーの小さな町から新たな全国市場にいたる共同体の秩序の中に位置づけられていった。